

(Anti)-symmetry in Syntax^{*}

遠藤喜雄

神田外語大学

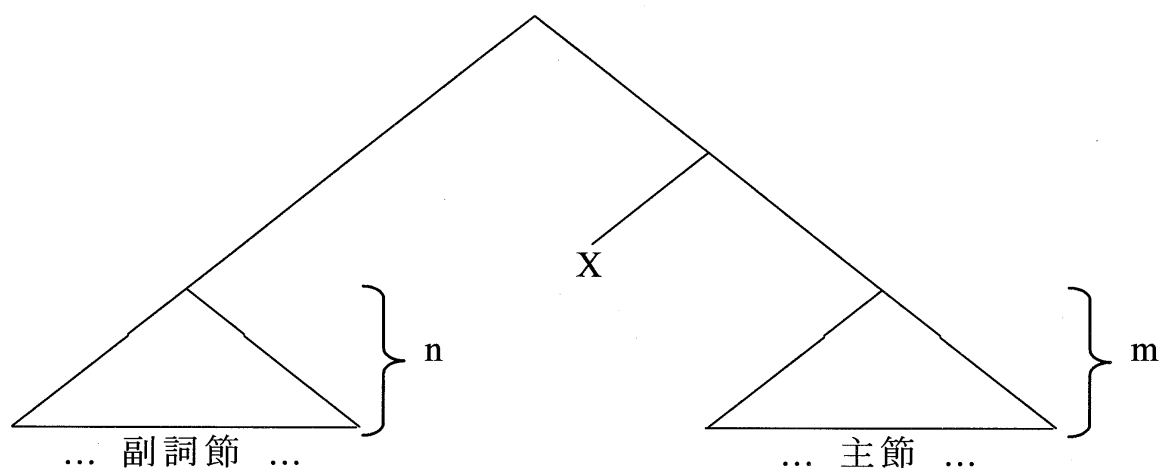
日本語学の研究の中から、副詞節に生じる階層的な機能範疇のタイプと副詞節が修飾する主節の要素との間にパラレルな関係がある現象を取り上げる。このパラレリズムが、普遍文法の性質、とりわけ Kayne(1994)の考えを応用することによって導きだされることを見る。また、Appendix では、同じ性質を主要部移動制約(head movement constraint; HMC)から導きだす可能性を論じる。

1. はじめに

本稿は、日本語の副詞節の構造を考察する。特に、日本語学／国語学の研究における知見が、一般言語理論に重要なインパクトをもたらすことを見る。結論を先取りして言えば、日本語の副詞節には、そこに含まれる機能範疇のタイプとその修飾先の間に次に見るパラレリズムがあり、その性質が Kayne(1994)の考えから導きだされることを見る。

^{*} 本稿は、2008 年 11 月に筑波大学で開催された日本英語学会のシンポジウム「統語と談話のインターフェイス」での口頭発表の原稿の一部に修正を施したものである。以下の方々からは、貴重なコメントをいただいた。ここに感謝の意を表したい（敬称略）：Guglielmo Cinque, Cedric Boeckx, Lilianne Haegeman, Luigi Rizzi, 井上和子、高橋将一、岸本秀樹、竹沢幸一、野田尚史、長谷川信子。尚、本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）『文の語用的機能と統語論：日本語の主文現象からの提言』（研究代表者：長谷川 信子）の補助を得てなされている。

図 1



($n \leq m$, 但し、 n と m は、機能範疇のタイプ)

本論は、次のように構成されている。まず、日本語学の副詞節に見られる機能範疇の階層性に関する研究を紹介する。次に、それらの性質が、 X' 理論で表現可能であることを見る。最後に、それらの性質が、Kayne (1994)の考えを応用することで説明可能となることを見る。また、Appendix では、同じ性質を主要部移動制約(head movement constraint; HMC)から導き出す可能性を論じる。

2. 日本語学の副詞節研究

まず、日本語の文の階層構造を確認しよう。

- (1) 並べられ てい なかつ た そう です よ
 動詞 ボイス アスペクト 否定 テンス ムード 丁寧 ムード
 (野田 1989: 75)

ここでは、動詞「並べ」に、ボイスの階層に属する「られ」が後続している。そして、次にアスペクト要素「られ」が生じている。Baker (1985) の鏡像原理(Mirror Principle)によれば、動詞につく形態素は、動詞から離れれば離れるほど、動詞より高い階層に属する。例えば、動詞よりもボイスの階層

の方が高く、「動詞<ボイス」と表すことが出来る。次に、ボイスにアスペクトの要素が後続していることから、アスペクト階層はボイスの階層よりも高いと考え、「ボイス<アスペクト」と表すことが出来る。推移性(transitivity)により、アスペクトの階層は、動詞よりも高い階層に属することとなり、「動詞<ボイス<アスペクト」という階層関係が生じる。以下、同じ手順で(1)に見る動詞につく形態素を見ると、次の階層構造が得られる。

- (2) 動詞<ボイス<アスペクト<否定<テンス<(話し手の)ムード<丁寧<(聞き手が関わる)ムード

この日本語の階層構造を念頭に置いて、副詞節を見よう。日本語の副詞節の包括的な先駆的研究として、南(1974)を挙げることができる。南は、次に見るように、文の従属度を、A類からD類の4種類に分類した。各々の類は、右側に明記された機能範疇を含むことが可能であり、A類が最も少ない機能範疇を含み、D類が最も多い機能範疇を含むことが可能である。(南の研究についての書評に、野田(1998)がある。)また、同時に、A類に含まれる機能範疇はB類にも含まれるという包含関係がある。

- (3) A類：様態、頻度の副詞＋補語＋述語 (南 1974)
B類：A類＋制限的修飾句＋主格＋(否定)＋時制(話し手の関わらない要素／領域)
C類：A類＋B類＋非制限的修飾句＋主題＋モーダル(主題、モーダル＝話し手の関わる要素／領域)
D類：A類＋B類＋C類＋呼掛け＋終助詞

具体例を見よう。

(4) A 類

- a. 太郎はラジオを聞きながら勉強をしました。
- b. 太郎は犬に追いかけられながら、家の中に入った。
(ボイス)
- c. *太郎はラジオを聞いていながら勉強した。
(アスペクト)
- d. *太郎はラジオを聞かないながら勉強した。(否定)
- e. *太郎はラジオを聞く／聞いたながら勉強した。
(テンス)
- f. *太郎はラジを聞くだろうながら勉強した。
(モーダル)

(cf.庵 2001:198)

ここでは、A 類の「一ながら」という副詞節が、その中に述語の補語「ラジオを」／「犬に」や(1)で示した低い階層のボイス成分「られ」を含むことが可能であるが、それよりも高い階層に属するアスペクト成分「てい」等が生じないことが示されている。

この A 類の副詞節とは異なり、次に見るように、B 類の「一のに」副詞節は、アスペクトやそれより高い階層の「否定」要素を含むことが可能である。しかし、否定よりも高い階層のモーダル要素が B 類に生じることは不可能である。

(5) B 類

- a. 雨が降っているのに、子供たちは外で遊んでいる。
- b. 雨が降っていないのに、運動会が中止になっている。
- c. *たぶん雨が降らないだろうのに、運動会が中止になってしまった。

一方、C 類の副詞節には、ムードの表現が生じることが可能である。

(6) C 類

- a. 雨は降るでしょうが、私は出かけます。
- b. 多分雨は降るだろうが、私は出かける。

ちなみに、(2)の形態素の階層には示されていないが、主題要素「は」は、「ムード」とほぼ同じ階層に属し、次に見るように、B 類には生じないが C 類には生じることが可能である。

- (7) a. 雨が／？は降ったのに、地面はあまり濡れていなかった。(B 類)
- b. 雨は降ったのに、地面はあまり濡れていなかった。
(C 類)

この B 類と C 類の差は、illocutionary force の有無に関係している。英語でも Haegeman(2006)が観察するように、話し手の主張に関連する独立した illocutionary force を持つ peripheral な副詞節にはムード表現や主題化が可能であるが(=8)、独立した illocutionary force を持たない core な副詞節には、そのような要素が生じることが不可能である(=9))。¹

- (8) a His face not many admired, while his character still fewer felt they could praise. (Quirk et al 1985: 1378)
- b The ferry will be fairly cheap, while/whereas the plane may / will probably be too expensive.
- (9) a. *If these exams you don't pass you won't get the degree.
- b. *Mary accepted the invitation without hesitation after John may have accepted it (based on Verstraete 2001: 149)

¹ 副詞節内の主題化は、項よりも副詞類の方が自由である。400ページ弱の英語の小説をチェックしてみたところ、peripheral な副詞節のなかに副詞類の主題化されている例は2例ほどあったが、項が主題化されている例は見つからなかった。

南の分類をさらに洗練した日本語学における副詞節研究として、野田(1989)を挙げることができる。野田は、次に見るように、各々のタイプの従属節に含まれる要素がなだらかな階層性を持つという内側の視点に加えて、その副詞節が主文のどの要素に相関するかという「外側」の視点から、新しい相関性を発見した。

(10)

○	○	○	○	○	○	○	○	×	(ら) れる	(ボイス)
○	○	○	○	○	○	○	○	×	ている	(アスペクト)
○	○	○	○	○	○	○	×	×	ない	(否定)
○	○	○	△	○	○	○	×	×	た	(テンス)
○	○	×	×	×	×	×	×	×	だろう	(対事的ムード)
○	×	×	×	×	×	×	×	×	ね	(対人的ムード)
独立文	—が	—ので	—とき	—ば	—ずに	—ながら				

この表は、次のように読む。例えば、一番下の「—が」は、「—したが」のような副詞節を表し、そのひとつ上を見ると、バツがついている。このバツを右に辿ると「ね」に行きつく。これは、「—したが」という副詞節が「ね」等の終助詞を「来たよねが」のように含むことが不可能であることを示している。一方、バツ欄の上にマルがついているのは、そこを右にたどったところにある「だろう」のようなムード表現を、「が」副詞節が含むことが、「来るようだが」に見るように可能であることを示している。

以上の点を念頭に置いて、野田は、さらに副詞節と主節の相関性に着目する。例えば、「ば」節は、主文のテンスと「た」形では、相関しないという規則性を持つ。

(11) 「ば」節：テンスと相関

雨が降れば、花火大会は順延する／*した。

そして、この「ば」節は、次に見るように、相関するテンスの下階層の要素（否定、アスペクト、ボイス）を含むことができるが、それより上の階層の要素（ムード）を含むことはできない。

- (12) a. 雨が降らなければ（否定）
b. 雨が降っていれば（アスペクト）
c. 雨に降られれば（ボイス）
d. *雨が降るだろうば（ムード）

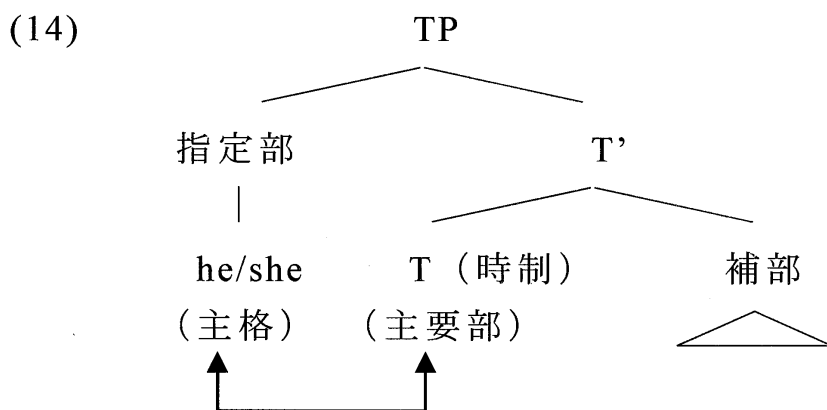
以上、日本語学の研究から、日本語の副詞節には、(i)その中に生じる機能範疇に関して階層性が存在すること、(ii)その階層性が相関する主節の要素の下に属する機能範疇のみを含むことが可能であることを見た。次節では、この相関性が、どのように説明可能となるかを見る。

3.説明

本節では、前節で見た副詞節における2つの相関性は、Kayne(1994)の考えを応用することで、X'理論の「主要部と指定部の一致(spec-head agreement)」関係により説明可能であることを見る。まず、主要部と指定部の一致の性質を確認しよう。具体例として、次に見る主節のテンスと主格が相関する事例を見よう。

- (13) a. He/She kissed Mary.
b. *Him/Her kissed Mary.

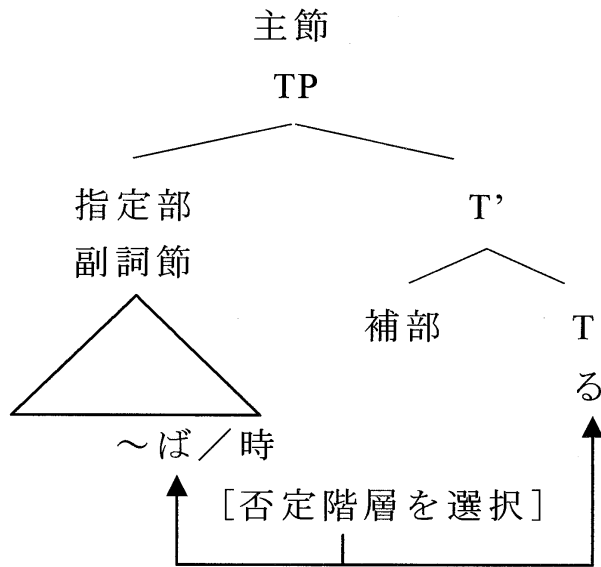
ここでは、主格とテンスが相関することが表現されている。このテンスと主格の相関性は、X'理論で、次のように主要部と指定部の一致の関係で表すことが可能である。



この考えを、上で見た日本語の従属節の「ば」節に当てはめてみよう。前に見たように、「ば」節は、次に見るように主要部のテンスと相関する。ここでは、「ば」節がテンスの階層(TP)の主要部に相関している。この事実を、次に見るように、「ば」節が相関するテンスの階層(TP)の指定部に生じ、主要部の「る」形との指定部—主要部の一致によって表現することが出来る。

(15) a. 明日雨が降れば試合は順延される／??た。

b.

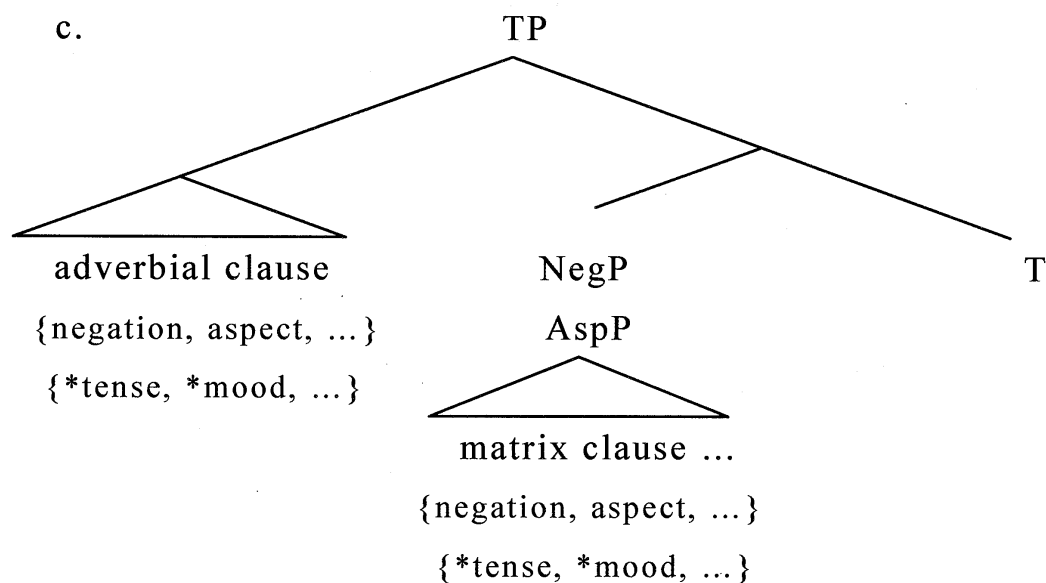


ここで、次に採録した日本語の機能範疇の階層性を思い出そう。

(2) 動詞＜ボイス＜アスペクト＜否定＜テンス＜(話し手の)
ムード＜丁寧＜(聞き手が関わる) ムード

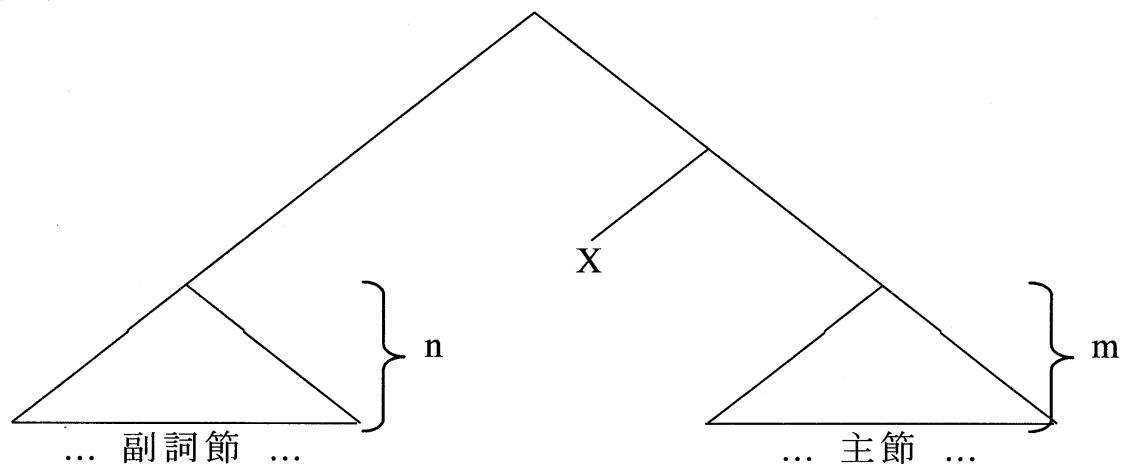
テンスの下の階層は否定の階層で、テンスの主要部はこの否定の階層を選択している。そして、このテンスの指定部に生じる「～ば」副詞節も、否定要素とその下のアスペクト階層の要素「てい」を含むことが可能である(=(16a))が、次に見るようにそれよりも高い階層のムード要素を含むことは不可能である(=(16b))。

- (16) a. 来なければ、来ていれば
 b. *来るだろうば、*来ますば
 c.



これは、主要部がその指定部に生じる副詞節に対して補部と同じ機能範疇の階層を選択する、という一般化で表現することが可能である。つまり、主要部の補部が、主要部と相關する副詞節と、その中に生じうる機能範疇のタイプに関して対称的(symmetrical)となっている。ここで対称的とは、入れ替えてもかわらない性質のことで、同じタイプの機能範疇を持つことを意味する。つまり、主要部が補部に選択する機能範疇のタイプと、主要部が相關する副詞節に生じることが可能な機能範疇が、同じタイプとなっている。

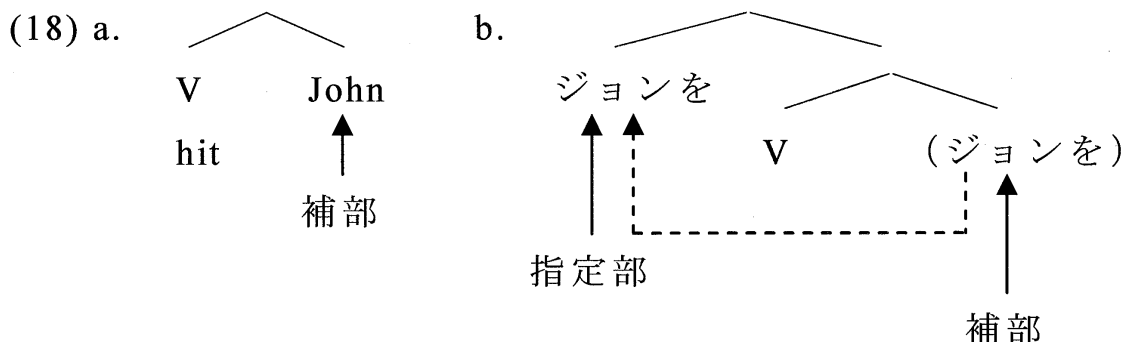
(17)



($n \leq m$, 但し、 n と m は、機能範疇のタイプ)

この状況は、直感的には、次のように述べる事が出来る。
Chomsky (2008)が述べるように、文の階層構造はボトムアップに組み立てられるが、問題の主節と従属節も、手に手を取り合って、ボトムアップに、そして、平行に(2)に見る機能範疇の階層を作っていた結果、同じタイプの機能範疇を持つことになる。

この主節と従属節のパラレリズムは、Kayne (1994)の考えを応用することで捉える事が出来る。Kayne によれば、次に見るように、日本語のような主要部が後ろに生じる言語は、補部の要素が指定部に移動しているという。



これは、次のように言い換えることが可能である。

(19) 主要部が補部に選択する要素は、指定部の位置に生じる。

副詞節も、主要部に相関する指定部の位置に生じるので、上の言明は、次のように言い換えることが出来る。

(20) 主要部が補部に課す選択の制限は、指定部位置と相関する副詞節に課される。

これは、一種のリサイクル (recycle) のメカニズムで、主要部の選択に関わる情報が、補部のみでなく、同じ指定部に生じる相関する副詞節にも再利用されている。この結果、主節と従属節は、生じうる機能範疇に関して対称性を示す。比喩的に言えば、主要部という親 (= 主要部) が、長男にあたる補部に選択する洋服 (= 機能範疇) のサイズが、指定部に生じる副詞節である次男に使い回される。親が年を重ねるにつれて、長男の服のサイズと使い回される次男の服のサイズは、平行に大きくなっていく。

具体的な派生を見よう。まず、動詞とその補部が併合 (Merge) される。

(21) ... V OBJ ... (Merge)

[DP]

この併合は、他動詞の持つ DP(OBJ) を選択するという素性による。次に、この補部 DP が指定部に生じ、連鎖 (chain) が形成される。

(22) ... OBJ [V (OBJ)]

/---chain---/

連鎖は、一番高い位置に生じる要素だけが発音されるため、動詞の補部は発音されない (以下、発音されない連鎖要素は、括弧でくくって示す)。この結果、目的語—述語の語順が生じ

る。

次に、ボイス(Voice)が併合される。

(23) ... Voice [VP OBJ V]
[VP]

ここで、ボイスの補部である VP が、指定部の位置に生じ、連鎖が形成される。(以下、発音されない連鎖要素は、議論に直接関係しない場合、明記しない。)

(24) ... [VP OBJ V] Voice
[VP]

次に、外項を導入する *v* が併合され、主語が生じる。

(25) SUBJ *v* ... [VoiceP [Voice [VP OBJ V]
[DP]

次にアスペクトの主要部が併合される。

(26) ... Asp [VoiceP SUB OBJ V]
[VoiceP]

このアスペクトが選択するボイス句が指定部に生じる。

(27) ... SUB OBJ V [AspP Asp
[VoiceP]

ここで、機能範疇のボイスに相関する副詞節（例えば「一ながら副詞節」）が生じる。（「ながら」副詞節がアスペクト句と相関することは、「テレビを見ながらご飯を食べた」とはいえるが、「テレビを見ながらご飯を食べ始める」とはいいにくいことから確認できる。

(28) ... [VoiceP Adverbial clause [VoiceP SUB OBJ V] [AspP Asp
[Voice]]

ここで重要なのはアスペクト句の主要部(=Asp)が「ボイス句を選択する」という制限を持ち、その情報が指定部に使い回されている点である。その結果、「一ながら」副詞節には、述語と内項の他にボイス要素「られ」が、「飴をなめながら」「雨に降られながら」に見るように生じることが可能だが、それよりも高い階層のアスペクト要素「てい」やムード要素「そう」等は、「飴をなめていながら」や「雨が降りそうながら」の非文法性に見るように不可能となる。

次に否定が併合され、その補部の否定句が指定部に生じる。

(29) ... AspP... Neg... (AspP)

ここで、否定と相関する副詞節（例えば、「一ずに」副詞節）が併合される。（この「一ずに」副詞節と否定の相関性は、例えば、「よく見ずに買った」は可能であるが、「よく見ずに買わなかった」が不可能となる事実から確認できる。）

(30) ...adverbial clause Neg (adverbial clause)
[AspP] [AspP]

ここでは、否定句の主要部(=Neg)が「アスペクト句を選択する」という情報が、否定に相関する副詞節に再利用される結果、「一ずに」副詞節には、アスペクト要素「てい」が「そんなところに立っていずに、こちらに来なさい」に見るように生じることが可能となり、その下の階層のボイス要素も生じることが、「雨に降られずにここまで来れた」が可能となる。一方、それよりも上の階層である、テンスやムード要素は選択されていないので、それらの成分を含む副詞句が「雨が降ったずに」や「雨が降りそうずに」に見るように不可能とな

る。

次に、テンスが併合され、それが指定部の位置に生じる。

(31) NegP Tense (NegP)

[Neg]

次に、この「否定句を選択する」という情報が、外側の指定部位置に使い回され、テンスに相関する副詞句（例えば、「一ば」副詞節）が生じる。

(32) adverbial clause NegP Tense (NegP)

[NegP]

ここでは、否定句を選択するという情報が、「一ば」副詞節に要求されているため、その中には、否定に関わる成分は、「雨が降らなければ」に見るように生じることが可能であり、同時に、否定よりも下の階層に属するアスペクト「てい」や、ボイス「られ」等が、「雨が降らなければ、買い物に行きましょう」や「雨に降られなければ、早く帰れるでしょう」が可能となる。（「一ば」副詞節がテンスに相関することは、「雨が降れば花火大会は順延する」に見るように、非過去形をとることから確認される。）

次に、話し手のムードが併合され、その補部である時制句が指定部位置に生じる。

(33) ... TP Speaker's Mood (TP) ...

ここで、話し手のムード句の主要部が持つ「時制句(=TP)を選択する」という情報が再利用され、外側の指定部に話し手のムード要素と相関する副詞節（例えば、「ので」副詞節）が生じる。この「一ので」副詞節と話し手のムードの相関性は、「安いので買った」は、自然であるが、「安いので買おう」が不自然になるという話し手のムードに課される制限から確認

される。)この「ので」副詞節は、時制句を選択するので、「雨が降ったので、雨宿りをしました。」に見るように、時制を含むことが可能で、また、その下の階層のアスペクト「てい」、ボイス「られ」、否定「な」を含むことが、「雨が降っていたので、雨宿りをしました」「山田さんに批判されたので、話をもめました」「雨が降らなかったなので、早く着きました」に見るように可能である。

最後に、聞き手が関わるムードが併合され、その補部である話し手のムード句が指定部の位置に生じる。

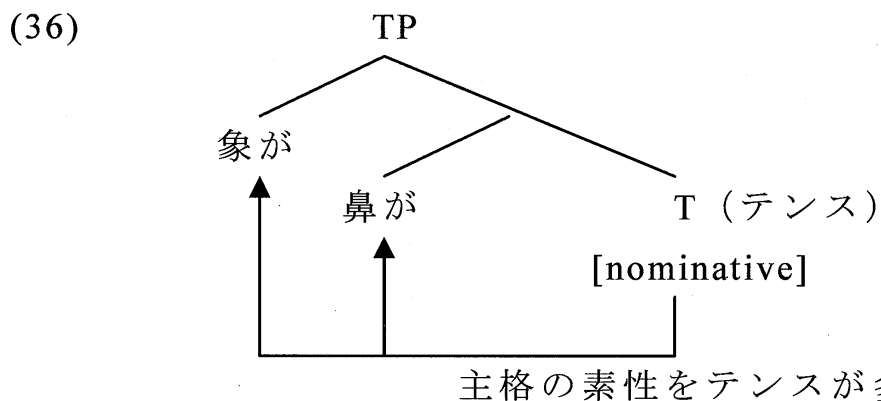
(34) Speaker's Mood hearer's Mood (speaker's mood)

[speaker's mood]

この聞き手が関わるムードと相関する副詞句（例えば「ーが」副詞節）が、その指定部位置に生じる。（この「ーが」副詞節と聞き手のムードとの相関性は、「環境はいいが不便です」は可能であるが、「環境はいいが不便ですか」が据わりが悪い事実によって確認される。）この「ーが」副詞節において、「話し手のムードを選択する」という情報が指定部の位置に再利用されているため、その中には、話し手のムード要素を含めることが、「雨が降るだろうが、サッカーの試合は中止にならないでしょう」に見るように可能となり、同時に、それよりも下の階層にあるボイス「られ」、アスペクト「てい」、否定「な」、時制の要素を含めることが、「雨に降られていないが、傘をさしている人がいた」に見るように可能となる。

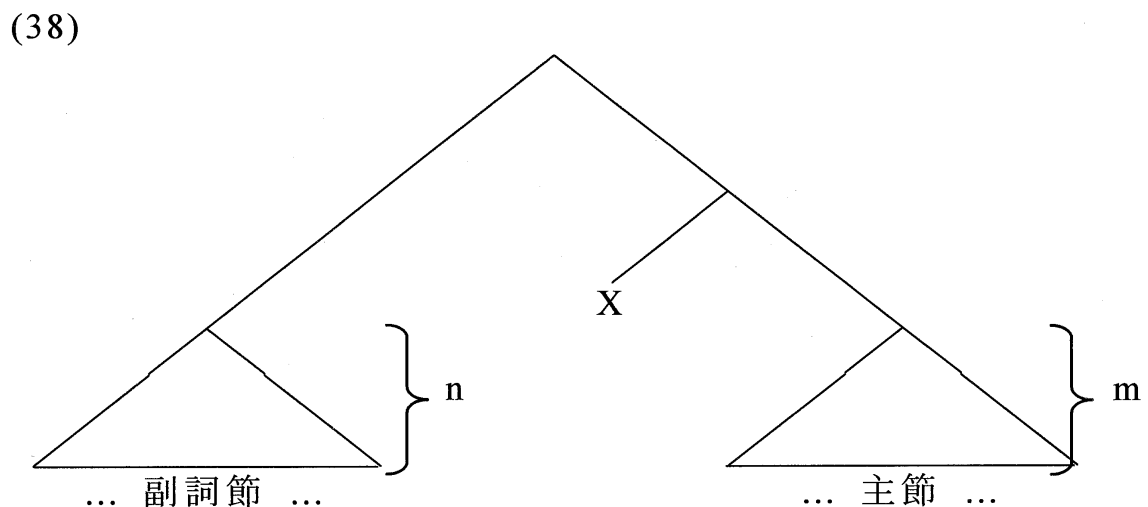
さて、主要部が補部に要求する選択情報の使い回しは、そもそもなぜ可能になるのであろうか？これは、指定部一般に見られる性質と考えることが出来る。例えば、次に見るように、日本語では、テンスが指定部の位置で「が」格を繰り返しマークすることが可能である(Kuroda 1988)。

- (35) a. 象の鼻が長い
 b. 象が鼻が長い



これと同様に、問題の従属節においても、補部に「ある階層の機能範疇を選択する」という指定（素性）が、指定部の位置で副詞節に再びリサイクルされる。その結果、テンスと相関する主節の階層は、相関する従属節と、同じ階層の機能範疇を含むこととなる。

以上をまとめると次の図のようになる。ここでは、主節の主要部 X が補部にある階層（=m）を選択する場合、それと相関する従属節が、指定部の位置で同じ階層（=n）を持つことが、主要部指定部の一致という句構造の普遍的な原則によることが表現されている。



($n \leq m$, 但し、 n と m は、機能範疇のタイプ)

4. 今後の展望

以上、本稿では、日本語の主節と副詞節の間において、主要部を軸にしてその中に生じることが可能な機能範疇に関して対称性が存在することを見た。その対称性は、主要部が補部に選択する情報が指定部になされ、同じ機能範疇のタイプの選択の情報が、指定部位置に生じる副詞節にも要求されるというリサイクルのメカニズムによる。

今後の展望に関して一言述べるなら、主節と副詞節の間に見られるパラレリズムが他の言語にも見られるか、という問題がある。たとえば、Nakajima (1982)は、副詞節が主節のどの要素に付加されるかという「外」側の視点から、英語の副詞節が日本語学の南と同様に4種類に分類されることを示した。ここで欠落している視点は、副詞節の「中」に生じる機能範疇が日本語の副詞節と同様に階層性が見られるかという点と、もし見られる場合、その階層性が副詞の付加される統語的位置と相関するかという点である。これは、今後の研究課題である。

参考文献

- Baker, Mark. 1985. The mirror principle and morphosyntactic explanation. *Linguistic Inquiry* 16(3): 373-415.
- Chomsky, Noam. 2007. Approaching UG from Below. In *Interface + Recursion = Language ?*, eds. by Uli Sauerland and Hans-Martin Gartner, Mouton, 1-29.
- Endo, Yoshio. 2007. *Locality and information structure: a cartographic approach to Japanese*. Amsterdam/Philadelphia: John Benajmins Publishing Company.
- Haegeman, Liliane. 2006. Argument fronting in English, Romance

- CLLD and the left periphery. In *Negation, tense and clausal architecture*, eds. by Raffaella Zanuttini, Hector Campos, Elena Herburger, and Paul Portner, Washington DC.: Georgetown University Press.
- Kayne, Richard. 1994. *The antisymmetry of syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Kuroda, S.-Y. (1988) Whether we agree or not: A comparative syntax of English and Japanese. In *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*, ed. by William J. Poser.
- 庵功男. 2001. 『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク.
- Nakajima, Heizo. 1982. The V4 system and bounding category. *Linguistic Analysis* 9, 341-378.
- 野田尚史. 1989. 「文構成」『講座日本語と日本語教育』宮地裕(編). 明治書院.
- 野田尚史. 1995 「文の階層構造から見た主題と取り立て」. 『日本語の主題と取り立て』益岡隆志、野田尚志、沼田善子(編). くろしお出版.
- 野田尚史. 1996. 『「は」と「が」』. くろしお出版.
- 野田尚史. 1998. 「書評 南不二男著『現代日本語研究』」『国語学』195 集: 35-40.
- 南不二男著. 1974. 『現代日本語の構造』大修館書店.
- Travis, Lisa. 1984. *Parameters and Effects of Word Order Variation*. Ph.D. Dissertation, Massachusetts Institute of Technology.

Appendix

ここでは、主節と副詞節に見られるパラレリズムの性質を主要部移動制約(head movement constraint; HMC)から導き出す可能性を論じる。

まず、日本語の機能範疇の配列を思い出そう。

- (i) 動詞<ボイス<アスペクト<否定<テンス<(話し手の)ムード<(聞き手が関わる)ムード


次に、この機能範疇の配列を基に、本文で論じた様々な副詞節が、どの機能範疇と相関するか見ながら、副詞節に生じる機能範疇の差が、どのように説明可能となるかを見よう。

- (A) 「ながら」副詞節は、次に見るようにアスペクト成分と相関する。

- (ii) テレビを見ながらご飯を食べた。

- (iii) ?テレビを見ながらご飯を食べ始める。

ここから、「ながら」という接続詞がアスペクトに関わる素性を持つことが示唆される。そこで、接続詞「ながら」が、(i)に見るアスペクトのポジションから文末の接続詞のポジション(=Conj)に移動すると考えよう。

- (iv) ... ボイス<アスペクト<否定<テンス<(話し手の)ムード<丁寧...Conj
ながら
- 
- The diagram illustrates the movement of the connector 'ながら' (while). It starts at its initial position below the main clause structure and moves to the Conj position at the end of the structure, indicated by a horizontal line and an upward arrow.

接続詞「ながら」は、 X^0 タイプの主要部であるので、この移動は主要部移動(head movement)である。さて、Travis(1984)以来よく知られているように、主要部移動は、主要部移動制約(head movement constraint: HMC)の局所性の原理(locality principle)に従う。HMCは、以下の構造で、Yのポジションか

e. *飴を舐めたねながら

次に、「一ずに」副詞節を見よう。

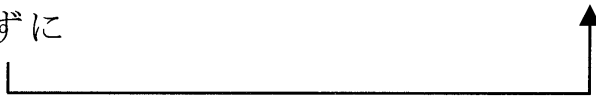
(B) 「一ずに」副詞節は、次に見るように否定句と相関する。

(vi) よく見ずに買った。

(x) ?よく見ずに買わなかった。

ここから、「一ずに」副詞節は、否定の素性を持ち、否定の階層から文末の接続詞のポジションに移動する。その際、他の主要部（テンス、ムード）が生じると、HMCにより、その移動は排除される。

(xi) ...ボイス<アスペクト<否定<テンス<(話し手の)ムード...Conj
ずに



そのため、「一ずに」副詞節には、テンスやムードの要素は生じない。

- (xii) a. 飴を舐めていずに
b. *飴を舐めたずに
c. *飴を舐めるだろうずに
d. *飴を舐めたねながら

(ちなみに、「一ずに」副詞節には、否定成分も生じない。これは、否定のポジションが一つしかないので、ほかの否定要素の生じるポジションがないためである。)

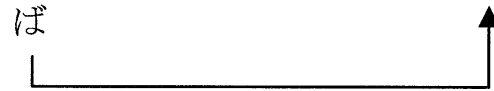
次に、「ば」節を見よう。

(C) 「一ば」副詞節は、次に見るように、非過去形をとるため、テンスに相関する。

(xiii) 雨が降れば花火大会は順延する。

この副詞節は、テンスの素性を持ち、テンスの主要部のポジションから文末の接続詞のポジションへ移動する。

(xiv) ...ボイス<アスペクト<否定<テンス<(話し手の)モード...Conj



そのため、間に別の主要部であるモードや丁寧の要素が生じると、HMC 違反が生じ、それらの要素が「一ずに」副詞節に生じることは不可能となる。

- (xv) a. 飴を舐めなければ
b. 飴を舐めていれば
c. 飴を舐めたならば
d. *飴を舐めるだろうば
e. *飴を舐めたねば

(ちなみに、「一ずに」副詞節には、テンスの成分も生じない。これは、テンスのポジションが一つしかないので、ほかのアスペクト要素の生じるポジションがないためである。)

次に、「一ので」副詞節を見よう。

(D) 「一ので」副詞節は、次に見るように、話し手のモードと相関する。

(xvi) 安いので買った。

(xvii) ? 安いので買おう。

ここから、「一ので」副詞節は、「話し手のモード」素性を持ち、次に見るように、話し手のモードのポジションから文末の接続詞のポジションに移動する。

(xiii) ...<テンス< (話し手の) ムード< (聞き手が関わる) ムード... Conj

ので



ここで、移動によって形成される連鎖の間に丁寧表現や聞き手のムードが介在すると、HMC 違反が生じる。そのため、「一ので」副詞節には、丁寧表現や聞き手のムードが関わる要素が生じることが不可能となる。

- (xix)a. 飴を舐めなかったので
- b. 飴を舐めていたので
- c. 飴を舐めたので
- d. *飴を舐めただろうので
- e. *飴を舐めたねので

(ちなみに、「一ので」副詞節には、話し手のムードの成分も生じない。これは、話し手のムードのポジションが一つしかないなので、ほかの話し手のムード要素の生じるポジションがないためである。)

最後に、「一が」副詞節を見よう。

(E) 「一が」副詞節は、次に見るように、聞き手のムードと相関する。

(xx) 環境はいいが不便です。

(xxi) ? 環境はいいが不便ですか。

ここから、「一が」副詞節が、「聞き手が関わるムード」の素性を持ち、このポジションから文末の接続詞のポジションへ移動が生じると、次の表示が得られる。

(xxii) ...<テンス<(話し手の)ムード<(聞き手が関わる)ムード... Conj



ここでは、移動によって形成される連鎖の間に介在要素がない。唯一課される制約は、「ーが」副詞節に、聞き手のムードの成分が生じないという点だけである。これは、聞き手のムードのポジションが一つしかないので、他の聞き手のムード要素の生じるポジションがないためである。

- (xxiii) a. 飴を舐めないが
b. 飴を舐めているが
c. 飴を舐めたが
d. 飴を舐めたらうが
e. *飴を舐めたねが

以上、南／野田に見る日本語の副詞節に生じる機能範疇の階層性を HMC から導き出す可能性を探った。ちなみに、主題表現が AーB 類に生じないのは、「は」が主要部位置を占め (cf. Kayne 1994)、それが HMC 違反を引き起こしているためと考えることが出来るが、その詳細は未解決の問題である (cf. Endo 2007)。

261-0014

千葉県千葉市美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学

言語科学研究科

y-endo@kanda.kuis.ac.jp